●読者の広場

愛情に生きた荘川桜

丹　羽　康　文
（岡崎市役所公園緑地課）

私は昨年の夏ふと能登半島へドライブに出かけた。国鉄のローカル線である越美南線ぞいに，国道156号線を北に進むと白鳥町に至る。そこで鉄道は終わりであるが，国道は北陸の福井へ抜ける158号線と分岐する。なお国道156号線を北へ進むと，スキーで有名な蛭ケ野高原につく。この高原が日本海と太平洋とに流れ出す分岐点になり，北は庄川で日本海の富山湾に流れる。その庄川の上流にあるのが「ロックフィル式」ダムで，日本の代表的ダムである。

私はこの御母衣湖のほとりに，大きな桜が2本目に付き車を止めた。私の他に3台ほどの車も停車し，桜を背に写真を写していた。私も仕事がらどんな桜か見たかったし，大きな桜が2本も並んで植わっているのは大変めずらしいと思い，石碑の文面に目を通してみた。

この桜は，昭和35年に移植したものである。桜の移植がむずかしいといわれるのに，移植してからすでに21年もたつが，葉はいっぱい繁り余り衰弱の気配は感じられない。能登から帰り，写真を見てどうしてもこの桜のことをわすれることができず，調べることにした。次にこの桜についての記録をたどってみることにした。

岐阜県のほぼ中央部にあるこの山あいに，平家の落武者が拓いた静かな部落があった。この平和な村に，昭和27年の夏にこの庄川の御母衣にダムができるといううわさが流れた。しかしこれはうわさではなかった。電源開発株式会社がこの御母衣にダムを作る場所を選んだのである。そのために水没する村，荘川村と白川村の人々は反対運動に立ちあがったのは当然である。先祖代々住みなれたこの土地を離れる気はもうとうない。昭和28年の正月，御母衣ダム絶対反対期成死守会が結成され，この中には白鉢巻に身を固めた人々が，この想い出深い故郷の土をどうしても水びたしにするなら，絶対に動かずに，泥土の中にうもれて，その運命を共にするといすわり，6年間も話がつかなかった。

そして昭和34年，ついにダムの建設に着手することになった。着手し始めたダム建設を見におとずれた，電源開発の初代総裁かつ元通産大臣でもあった高碕達之助氏が湖底に沈む部落を思い，深い愛惜に胸を痛めながら散歩をしていると，ふと中野の光輪寺に立ちよった。その時，寺の境内に大きな老桜があり，この巨桜を見て，このまま水没させてしまうのはとても耐え難いと心を痛め，なんとしてもあの桜の命を助けねばならぬといい続けた。

高碕氏は東京に帰り，数人の大学の専門家を訪ね，移植のことを相談してみたが，だれ一人賛成してくれる人がいなく，かえってその無謀さを笑われたという。しかしどうしてもわすれることができず悩んだ。そして数日後，神戸に住んでおられた桜博士と言われた笹部新太郎氏のことを思い出し，神戸まで出向き笹部氏に荘川の桜をどうしても助けたいと熱心に頼み込んだ。しかし笹部氏は首をたてに振ってはくれなかった。笹部氏は桜に人生をついやした人であったが，年齢はすでに70歳を過ぎていた。400年近い老樹を移植するということは，普通の樹木であっても大変なことである。特に，桜の移植は一般的に無理だといわれ

ているのに，こんな大老桜を移植することは，この年代において日本でも，また世界でも例がないと思われる。しかし高碕氏の桜に対する愛情と，水没住民のためにもこの桜を移植し，少しのなぐさめと思い出になるのならば，私産を投げうっても，この桜の命を助けたかった。

笹部氏は高碕氏の熱意に負けてこの桜に命をかけることにした。この話を聞いた当時，日本で有名な愛知県豊橋市の造園家である庭正こと丹羽政光氏が桜を移植することになったが，技術と理論ではなかなか意見が合わず，かなりもめたと聞いている。そしてついに移植工事が始まったのである。

工事は間組と庭正造園とで施工された。昭和35年11月15日から12月9日までの23日間かかった。工事にはこの時代最大の機械力を使用した。15トンクレーン2台，30トンブルドーザー2台，40トンブルドーザ1台と総勢500人の人が作業にたずさわった。

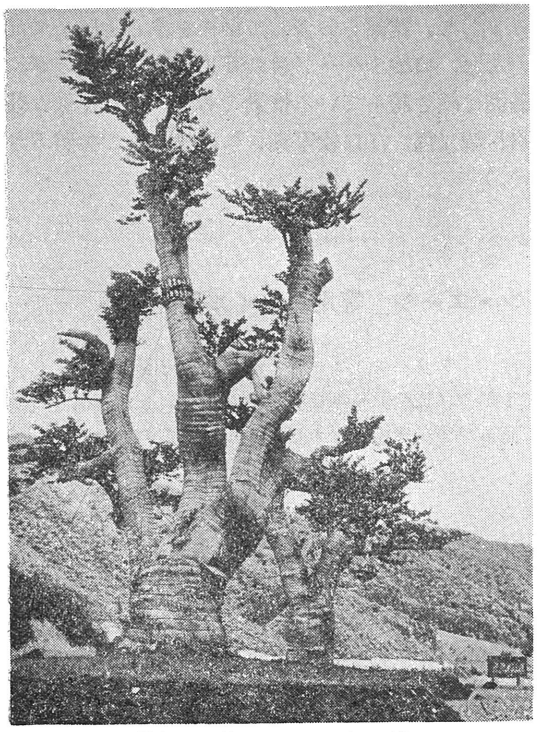
移植した桜についてのべることにする。

樹種はアズマヒガンザクラで，そのうち照蓮寺の桜は高さ21メートル，幹の周囲6.66メートル，重量38トン，樹齢350年，そして光輪寺の桜は高さ20メートル，幹の周囲6メートル，重量35トンであった。双方ともに，寺から600メートル運搬し，水のこない高台に移された。しかしいくら努力しても，絶対活着するという保障はどこにもない。翌年の春がくるまではなんともいえない，たとえ活着しても桜の場合は，年々衰弱するばかりである。

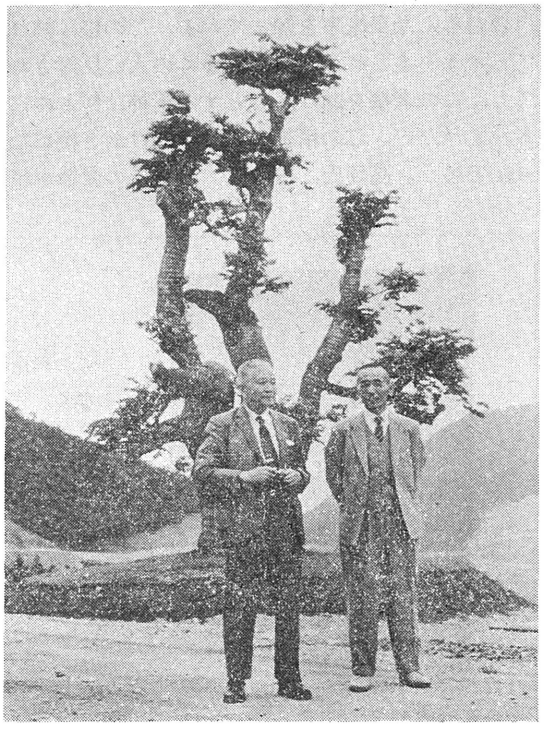
しかし昨年私が見たかぎりでは，光輪寺の桜が地上から3メートル上がった部分より5メートルほどくさりが入り，その部分を銅板で保護してあるのみだが元気である。もう一方の照蓮寺の桜はまったく衰えていない。

そしてついに昭和36年の春が来た。こもの間から若芽が顔を出しているのを通りがかりの人が見つけた。花も咲いたのである。6月に除幕式が行われた。この時には，かなりの葉が繁り，式典に出席の高碕氏，笹部氏，丹羽氏が大変喜こんだ。

そのなかで一番喜んだのは，なんといっても荘川村の湖底に家が沈んだ人々である。とうとう活



昭和35年移植，その翌年の桜



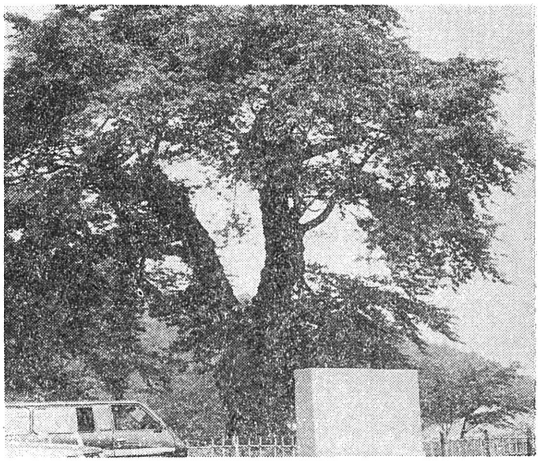
笹部新太郎氏と庭正造園社長

着したのである。これを記念して歌がつくらた。

「ふるさとは湖底（みなそこ）となりつうつし来しこの老桜さけとこしへに」と，碑文が石碑に刻み込まれ建立された。そしてその後，昭和47年5月3日，御母衣ダムふるさと友の会が発足し，男女200名ほどが，毎年ここをおとずれることにしている。

高碕氏の言葉に「進歩の名のもとに，古き姿は次第に失われてゆく。だが，人の力で救えるものは，なんとかして残してゆきたい。古きものは古きがゆえに尊いのである」。私も素晴しい言葉だと思う。日本の各都市で何万本植樹達成，1人何本植樹だといい自慢している。植えるのはいと簡単であるが，育てるのが大変である。昭和34，5年は，経済は高度成長時代に入り，オリンピックの会場建設や新幹線建設等，建設ラッシュで，樹木の移植や保護をするなんていう時代ではなかったはずである。

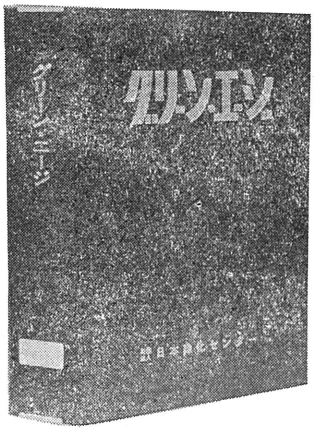
この桜にはいろんな歴史が刻み込まれている。台風，火災，地震等の災害や，出産，死亡，そして村の若者のロマンスや，結婚式等，この桜は荘川のいろんな出来事を知っている。この桜は枯れてしまうかもしれなかった。多くの人に反対されても，この老桜を助けようとする精神は何ものにもかえがたい。この精神愛が桜を助けたき綱になったと思う。高碕氏，笹部氏，丹羽氏の愛情が精力となって伝わったのであろう。この桜はまだまだ何百年も生き続けることであろう。高碕達之助氏の樹木に対するやさしい気持を，少しでも多くの人達に理解していただきたい。



昭和56年8月の光輪寺の桜

最後に愛知県豊橋市庭正造園から貴重な写真，資料，荘川村役場から資料をベースにして書いてみました。誌面をお借して御礼を申し上げます。

なお，口絵1ページ目の荘川桜は，昨年の春，満開に咲き誇っている情景である。写真提供は荘川村観光係。（口絵写真の移植状況をご参照下さい。）



「グリーン・エージ」専用ファイル発売

この専用ファイルは，「グリーン・エージ」誌に穴などを開けることなく，完全な形で1年分（12冊）長期保存ができます。しかも出し入れはワンタッチで簡単です。表紙は緑のビニール製。この機会にぜひお求め下さい。

・**領　価**・1冊600円（送料350円）2冊以上は500円（送料別）
申込先・〒107 東京都港区赤坂1－9－13三会堂ビル
ＴＥＬ（03）585・3561
財・日本緑化センター「グリーン・エージ」編集室
なお，住所，氏名，電話番号，冊数など明記して下さい。